第１回国際シンポジウム（大阪）記録

＜第２部＞　大阪・ハンブルクにみる市民文化にもとづくエリアマネジメントの可能性

日時：2010 年 8 月 22 日（日）　13.30～14.40
場所：大阪市立住まい情報センター　ホール

発表者：
　大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）
　谷口 靖弘（大阪芸術大学短期大学部教授、大阪・九条下町ツアー主宰）
　クルト・ラインケン（steg 不動産開発部門責任者）
司会：高梨 友宏（大阪市立大学准教授）

高梨：みなさんこんにちは。時間が参りましたので、平成 22 年度大阪市立大学都市問題研究、「住みごたえのある町をつくるー大阪ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメントー」関係の国際シンポジウムという形で、「イベント・下町・エリアマネジメントー大阪・ハンブルクの取り組みからー」、という内容で国際シンポジウムを続けさせていただきます。只今から始まるのは第二部です。

　第二部では、初めに大場茂明大阪市立大学教授から、ハンブルクのサンクトパウリ地区と大阪の九条の地区の両地区の簡単なプロフィールと住民特性、及び住みごたえのあるまちを作るための前提条件となる地域資源と担い手の間の関係についてコメントさせていただきます。そして続いて、お二人目ですが、大阪の九条地区の市民団体であります、「大阪九条下町ツアー」主催の谷口靖弘・大阪芸術大学短期大学教授から、観光ボランティアの案内で九条のまちを楽しく歩くというユニークなまち歩きツアーを中心に、現在九条で展開されているまちづくりの取り組みについてご紹介していただきます。そして続いて、ドイツのハンブルク・ザンクト・パウリ地区における多彩な文化活動が地区の魅力の向上に果たす役割について、Steg という都市更新開発機構と日本語で訳せると思いますけども、Steg という公団の不動産開発部門の責任者であります、クルト・ラインケンさんに報告をいただきます。以上の報告を済ませた後で、10 分ほど休憩の時間を取らせていただいて、そのあとシンポジウム・パネルディスカッションを続けさせていただきたいと思います。パネルディスカッションとご発表の間の 10 分ほどの休憩時間ですけれども、もしご関心がおありでしたら、入口を出たところにハンブルクの町の写真をパネル展示しておりますので、そちらの方もご覧いただければと思います。それでは最初に大場先生からご報告をいただきます。

大場：このプロジェクトの研究代表をしております、大阪市立大学の大場でございます。

本日はお暑い中お集まりいただきまして、ありがとうございます。すでに午前中から出ていただいている方には部分的に重複してしまうことになりますけども、この共同研究が目指す、文化に基づくまちづくりということとかかわりまして、地元の地域資源ですとか担い手、そういった事柄がいかに「住みごたえのある町」をつくるために重要であるかということを、大阪・九条とドイツ、ザンクト・パウリの両事例地区の簡単なプロフィールと合わせて説明してまいりたいと思います。

このシンポジウムのタイトルは「イベント・下町・エリアマネジメント」という題目で、チラシ作製のために二か月ほど前に作ったんですが、それぞれの地域の特性に応じたまちづくりがあるだろうと。で、今回は既成市街地、インナーシティ、商工住混合地域はいわゆる工業化が始まった 19 世紀半ば、そういった時期に急速に発展しました地域を舞台としまして、対象となる地域資源は目に見えるものだけではなく、無形の地域資源、それは祭りであったり、いろんな催しものであったりといったイベントを活用して、地域で活動しているいろいろな担い手がいるわけですが、そのような様々なアクターによる文化活動を、エリアマネジメント活動を基に市民文化に基づいた住みごたえのあるまちづくり、これは具体的には、場合によっては一部不便な部分もあるかもしれません。例えば道が狭いといったこと、そういう面もあるかもしれませんが、住んでみて非常に楽しい、午前中にドイツ語で“gemütlich”という単語が出てきましたが、そういうまちづくりモデルができないかと、それが都市の中心に近い新たなところで居住の魅力を創り出し、そしてそれが現在問題になっている衰退地域の再生、発展に貢献できるのではないか、ということで共同研究を昨年度よりスタートさせたわけです。

それでは部分的に、先ほど説明いたしました、イベント、下町、エリアマネジメントというものを一つ一つ取り上げながら、今回のプロジェクトとのかかわりで説明していきます。まずはじめに、大都市圏におけるエリア別コミュニティ事業がどのようなものが考えられるかを簡単にまとめました。先ほどの下町、インナーシティという地域が一般に都市観光ですとか、地域間交流というのがコミュニティ事業のテーマになっております。この後ご紹介いただく谷口さんを中心に九条で展開されている下町ツアーはまさにこれに相当するものだと思います。

一方で、もう少し中心都市から遠ざかった、郊外の衛星都市、遅くとも 1960 年代くらいまでに郊外化が本格化したような地域では、ほぼ人口の増加傾向は落ち着いて、かつて高度成長期の段階までに急速に発展した地域のアイデンティティを見出す、地域イメージを高めるといったことが一つの方法として、地域ブランドづくり、それを地元での販売などが挙げられます。これは私のイメージでは、事例として尼崎が挙げられます。尼崎は私たち関西に住んでいる者にとっては、詳しいイメージ、それもプラス面、マイナス面両方のイメージがあると思うんですが、その中では近松の話のような、都市文化にまつわる話もあるんですが、ちょっと離れた関東の人たちにとってのイメージでは工業都市、公害、特に大気汚染などといったネガティブなイメージとつながっているんですが、それを地域

ブランド、もともとあったものを再発見、復興することによって。たまたま私が助手をやっていた頃、20 年前くらいになるんですが、日本都市学会という全国大会が尼崎で開かれまして、当時は景気が良かったかもしれませんが、参加者に尼崎の名産の 500ml 位の醤油、これは「生揚（きあげ）醤油」という保存の効かないものを参加した記念として一本一本渡してくれた時がありました。それが言わば尼崎におけるブランドイメージを作っていくはじめだったと思います。現在は生揚醤油も含めて阪神尼崎駅のステーションデパートにあるお店で売っているそうです。

それから、もう少し外側に行きますと、開発の限界、通勤の限界地に超郊外の新興住宅地というのがあります。そのようなところは、もともと集落の無かったような山とかを切り開いて住宅地を作っていく。したがって、そのようなところの地域づくりは、自然との共生であったり、具体的には地元住民の減少によって荒れているかつての共有地を復活させるといった里山コモンズのような取り組みが、一つの典型的なコミュニティ事業としてあげられると思います。

いずれにしても、そのようなコミュニティ事業において重要なのは、地域資源をどう生かすかということです。これはこれからお話します、九条における地域資源を簡単に、一部谷口先生にご教示いただきながら、取り上げてみました。川の話、道の話、それから近代以前なのか以後なのかは別として、建造物としての地域資源がこれだけあります。例えば、非常に有名なものでは安治川の川底トンネル、茨住吉神社、もう少し下には町工場などの建物、またはツアーの目玉になります「下町グルメ」というものも挙げられます。一方で無形のものは、イベント、祭礼ですとか、その他のものを挙げておきました。これがすべてではありませんが。

それから、九条を含めたインナーシティの取り組みとしまして、もう一つの対象地域のハンブルクでは、これから話が出ますザンクト・パウリを含めて、ある時期までは非常に衰退をしていました。そういうところで後程の Steg などの再生事業の展開によって大阪よりも早い段階で新たな都市居住の魅力を創り出すことに成功しております。それが午前中も申し上げました、”Szenenviertel”というようなものとして、これは若者ですとか、学生層、そういった人たちに人気を集めております。これからのディスカッションのところで私も質問してみたいのですが、こういった劇的な変容過程を誰が、何がリードしたのかということが関心のあるところです。

もう一つの話として、エリアマネジメントにおける組織のあり方についてもお話ししておきます。これは全てではありませんが、多分一番と三番の対比が一番わかりやすいと思います。まず一番はアンブレラ型、これは全体を一つの仕組みでくくる。例えば、ハンブルクではないですが、ドイツのルール地域のデュースブルクにマルクスローという地域がありまして、そこのまちづくりの場合、いろんなアクターの代表者が一堂に会して意思決定を行う市区委員会という、全体を取りまとめる組織があるようなタイプ。一方で三番の完成版ではありませんが、まとめつつあるのはこのような形で、これからお話しいただく

九条下町ツアーの組織で、それも含めて、九条の域内には様々な組織がありまして、一方で左側には河川の繋がりということで関係のある、言わば緩やかなネットワークを作る「安治川を愛する会」以下の市民グループがあります。いずれにしても、今回のシンポジウムでは組織のあり方を考えるのではなく、むしろこのような組織が組みあがる段階で、いろんな萌芽的な取り組みに取り組んでくのかということがテーマになろうかと思います。

以上のことを受けて、事例地区のプロフィールを説明していこうと思います。九条にしましても、ザンクト・パウリにしましても、かつて水上交通の時代に都市の玄関口であった港湾、九条も川口が江戸時代以来の河川港ですが、そういった港湾に近接したインナーシティという共通点があります。九条はみなさんご存知だと思いますが、USJ というのは元もと明治以降大阪の近代工業、大工場が集積した地域でした。そこに部品等を供給する、臨海工業地帯のバックヤードとして発展した地域です。1997 年から大阪九条下町ツアーの活動が開始しております。この九条の地域をザンクト・パウリの地区と比べるときの一つの重要なポイントは、住民が世代を越えて住み続けているという特徴が挙げられます。一方でザンクト・パウリ地区、後程詳しいご報告をいただきますが、かつてのイメージはドイツにおいても、日本もそうですが、非常にネガティブなもの、歓楽街であったり、衰退する市街地から、急激に活気のある盛り場、人気のある住宅地に変貌しています。もちろん、それの契機になったのは 1990 年代以来の再開発プロジェクトなんですが、いずれにしましても九条と違うポイントは、住民層が学生や若者、アーティストが入ることによってかなり交替している。こういった住民層の違いが、非常に大きな特色になるかと思います。今後の第二部の後半になりますパネルディスカッションへの展開としましては、こういった現在までの大阪ないしハンブルクにおける、さしあたり事例地区ですが、の取り組みを振り返る中で、いわゆる文化にベースを置いた地区の活性化モデルがどのようなものが考えられるのか。これはパネルディスカッションの中で、展開を含めて考えられればと思います。私からのコメントは以上です。

高梨：大場先生、ありがとうございました。続きまして、二人目の報告ですが、大阪芸術大学短期大学部教授でいらっしゃいます、谷口靖弘先生に「観光ボランティアの案内で九条の街を楽しく歩く」と題してご報告をいただきます。

谷口：どうも、みなさんこんにちは。大阪芸術大学短期大学部の谷口でございますが、最初に芸術とっ私が取り組んでいる観光との関連性についてお話をしたいと思いますが。みなさんもしヨーロッパを旅行されると、24 時間芸術的なものが周りにあると思います。当然、訪問するのが美術館であり、それらも含めて、ひょっとして皆さんが泊まっているホテルが古城であるかも分かりませんよね。そうすると、「先生、芸術大学で、なんで旅を教えてんねん」ということを聞かれると、「芸術と旅というのは、めっちゃくちゃ関係あるねんで」と、納得頂いております。それで芸術大学でも観光学を教えております。その中でも観光研究のフィールドワークとして 13 年前から九条の下町ツアーというのをさ

せていただいております。頂戴した時間が 20 分ということでございますので、あまり詳しくはお話しできませんので、できるだけ簡潔にお話ししていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず最初に、このお配りした資料で、九条の現状についてお話をしたいと思います。地図がない方、前の方に用意してますので、申し訳ございません、日本語表示だけで申し訳ございませんが、お手元にない方はお知らせください。今、大場先生のお話と若干ダブりますが、この地図をご覧いただいてもわかりますように、九条という町は、みんな川に、木津川、安治川、そして昔は境川という川、まったく三角州の町でございました。そしてよく聞かれるのが、「先生住んでる町、一条も二条もないのに、何で九条というんですか？」ということを聞かれるんですが、なんで九条になったのかという話はまた後程させていただきますが、現況の概略をこの地図でお話します。さっき大場先生の話にもありました、右側の上が大阪ドーム、今は京セラドームになってますが、その下側のあたりに川口の居留地といって、これがこれから非常にハンブルクとの関係で、スクラップ&ビルドの重要な地域として注目されると思います。そして九条の街を取り上げていただいたのが住民としてうれしいわけですが、九条とハンブルクの街をスケールは違いますがよく似てるなぁと思うのは、河川ですね。水というものをベースに町おこしをしないといけないということですね。そして空襲で、大部分のよき昔の建物がなくなってしまったという点も似通っているかと思います。ただ住宅の構造上の問題から言うと、九条は大半が木造ですが、ハンブルクの場合はコンクリートということ、これは違いでございます。それともう一つ非常によく似ているというのは、九条地区も住宅とショップ、お店と工場、そして松島遊郭やら、九条 OS という歓楽街が中に入っていると。そういう観点で言うと、スケールは違いますが、ハンブルクと九条は似ているという気持ちになりました。

それで、この地図の九条地区のこれから一番問題になりますのが、F ですね、面白マップの「ま」の下の F ポイント、実はここが明治の初めの大阪開港の地、今は港は大阪港にあるわけですが。当時、明治の頃は、江戸も含めて、安治川を上った 5 ㎞も川上の F の地点に港がございましたし、ここに税関もございました。そして、大阪電信発祥の地ということで、わかりやすく言えば NTT の故郷もここだというところが、この F の地点ですね。ところがここに今大きな問題が起きております。ここに税関があったということは、船でモノを運ぶからここに税関があったわけで、トラック輸送に代わってから、ここに税関は要らなくなったわけですね。一昨年に税関業務を、富島の税関業務はなくなりまして、一部建物が残っておりますが、今は大きな更地になりました。そしてその更地が今、ある部分は国の所有物であるし、ある部分は市の所有物であると、この跡地を一体どうするのかと。単純にマンションが建つのかという話もありますし、ここに税関ミュージアムというものを作って親水広場としてやった方がいいという地元の切実な意見を持っている人もいらっしゃいますが、今のところ決定はしていないというところです。

そしてもう一つ、大阪がなぜ水の都といわれるようになったのかというのは、あとでビ

デオを使ってお話ししたいと思いますが、水の都、韓国の場合はいったん埋めた川をもう一度掘りなおして、川を作ったりしております。やはり水というのは私たちの生活にとって重要なものでございまして、ちょうど SL が左側を走っておりますが、この横側に昔は境川という川がありまして、今は埋め立てられて桜並木があるんですが。これを完全に回復すると、まったく三角州の島が再興すると、これが将来町の建設に対してどのような影響を与えるのかということを私たちは気にしているのであります。

では、なぜ九条下町ツアーというのを始めたのかということについて、お話をしていきたいと思います。では、本当は芸術大学と言いながら、今日お見せするビデオは私の手作りですが、編集も何もしておりません。芸術の、テレビの専門家もいるんですが、全然セクションが違いますので...。ほんとはこれだけでお話ししようかと思ったのですが、やはり映像で訴えたほうがいいかと思いましたので、手作りのモノですんで、その点お許しをいただきたいと思います。まず、私たちがこの下町ツアーを始めるきっかけになったのは平成 9 年、1997 年にできた大阪ドームでございます。このドームができたことをきっかけに、できた当初、なんと毎日 3 万人も 4 万人ものお客さんがいらっしゃいまして、私たちの住みますこの九条も、駅に改札ストップができるくらい、お客さんがいらっしゃいました。地下鉄九条駅でございます。昔九条の商店街というのは西の心斎橋と呼ばれるくらい、人が多かったわけですが、戦後だんだんさみしくなりまして、商店街は現在ナインモールという商店街、そしてこの後にキララ九条という商店街、これは両方 900m 位の長さがございますが、ご多分に洩れずシャッターの店が増えております。実は私、昔旅行会社の添乗員をしていたもので、「あれだけ大阪ドームに来るお客さんを、何とか九条に来る方法を考えてよ」と言われまして、「わかりました、じゃあ一回考えてみます」と言いましたが、じゃ何を見せようかという風にチェックをしてみると、いわゆるハードというものはあまりありません。大阪ドームは一番でしょう、そしてさっき先生もお話しいただきました、安治川川底トンネルというトンネルで、1945 年に日本で初めて掘ったトンネルではなくて、「沈埋工法」と申しまして、できたトンネルを持ってきて埋めてできたトンネルです。なぜかというとこの当時は船がよく運行されていましたので橋が作れなかったんです。このトンネル地下 17m まで階段もございますし、今は自転車と人がエレベーターで降りることができるんですが、昭和 50 年代まではこの周辺に橋がないということで、実はトラックがですね、これは川底 18m、幅が 80m ございます。これがやはり、ハードとしては名物でございます。観光客、特に最近は修学旅行生がやってきてくれるようになりまして、「ここは珍しいね。おっちゃん、この上、川やねぇ」と。昔はトラックがここに並んで、大型エレベーターでですね、川底へ降りて、そして川底を自走して向こうのエレベーターで対岸へ上がるという、世界でも珍しいものです。これはロンドンのテムズ川にもありますし、もっと規模の大きいものはハンブルクにもございます。そういう意味で川底のトンネルというのがあるというのも、似通った面でございます。それ以外に見せるものというのは、登録有形文化財として、つい最近指定を受けたものです。これは規

制のきついものではなくて、50 年以上たてば指定が受けやすいという、土肥さんというおうち。そしてこれは山下さんというおうちで、これは先ほどの家は明治の家だったんですが、こっちは昭和の初めのころの家でございます。

実はハード的にお見せするのは、大阪ドーム、安治川トンネル、そして古い二軒の家しかないんですね。「そんなところへ、誰が見に来てくれんねん」ということがありまして、みんなと検討した結果、目で見るものは、たいしたものはないですが、九条言うたら下町グルメ、おいしいものがあるのではないかということで、やっと見つけました。それを一か所でたくさん食べるのではなくて、百貨店の地下食料品売り場の試食の感じで、たこ焼き 2 個とかお好み焼き 3 分の 1 とか、そういうのを食べ歩くツアーをやろうじゃないかということで始めました。まず最初は虎屋といいます、90 年以上の歴史がございます粟おこしのお店でございます。若い方は、大阪土産と言えばたこ焼きといいますが、やはり粟おこしが一番ですよね。そして、こんなにユニークなシュークリームもありました。これは大阪ドームを型どったミニシュークリームや、阪神や近鉄の帽子の形をしたエクレアなんかも売ってます。ほんとはこれ登録商標の商標違反なんでしょうが、大きな商売ではないもんですから、テレビでもよく紹介されますが、あんまりクレームは来ておりません。こういう九条だけしかないような食べ物を発掘していったわけです。やっぱり大阪と言えば阪神とたこ焼きしかないんかというと、それしかないんですね。そして、地方からきた修学旅行生は、阪神電車の高架下で六甲おろしを歌うんですね。クイズです。阪神なんば線が昨年開通しましたんで、その下で六甲おろし歌うかというのはみんな分からない。でも歌うんです。しばらくすると電車が走ってきて、阪神電車を応援するために、西へ行くと甲子園、東へ行くと大阪ドームへ行くと、これは野球路線なんだというお遊びをしてます。ここに出てまいりましたのは豚まんです。これは蒸してませんが、実際に蒸した豚まん。そして次が世界に一個しかございません。私が考えたんです。まじめなはなし。世界に一個しかないんです。「ジョーズお好み」といいまして、お好み焼き全体にサメの骨粉が入っております。そして目はキャビアでございます。キャビアはサメの卵ですから、サメ尽くし。これもカタカナのジョーズというのは使えません。USJ の登録商標ですので、漢字の「ジョーズお好み」としてツアー専用に$4 で売り出しております。

というようなものをいっぱい意識して作り上げて、それを順番に歩いて、こういう地図も作っております。ところが、歴史的なものはなかなか残っておりませんので、苦肉の策をとりました。それは紙芝居で、九条の歴史を順に紹介していくということを考えたんです。これが九条の地図でございます。そして、私たちがやってるツアーが、実際にハンブルクでやってるスケールの大きい町おこしとどう関係があるのかということを若干心配しているのですが、やはり九条の街を地元の方が案外知らないんですよね。その再発見のために、「九条っていいとこやで」と、私たちは地元の方より、他所の人に対して、「面白い町やね、古い建物なんかあって、あんなん残さなアカンで」ということを言われるわけですね。そして、紙芝居がどのようなものかというと、水の都の原点であります、「昔の

大阪はこうやった。九条は昔は海の底やったんやで、大地になってるのは、上町台地だけなんですよ」という話をしまして、三角州の島々に淀川やら大和川から泥が埋まってくることによって、「難波八十島」と呼ばれるくらい多くの島々ができました。その島々をつなぐために必要なのが橋です。それが「浪華八百八橋」ということで、水の都の原点ということを紙芝居と使っていろいろ話をしております。

これ以外に、先ほどお話ししましたように、川を大事にしようということで、川沿いを歩くという会もできまして。今、川の周辺のいろんな観光地を写真に入れてもうすぐ完成して、10 月の初めに、さっき申し上げた三角形の川を全部歩くというツアーを、西区の区役所の皆さんと協力して、水というものの素晴らしさを再発見しようじゃないかということを、今進めております。そして秋には展示場といいまして、懐かしい九条の写真がいっぱい出てまいりました。50 年前の写真とか 50 年前の九条の茨住吉（神社）のお祭りの写真なんかを、前は一か所しかやらなかったんですが、その会場を何か所かに分けて、それを見て歩いているうちに九条の歴史といろんな建物が見られるという「展示場ウォーク」というものを今企画しております。やはり大阪ということであれば、どうしても紙芝居の中でどこの町でも共通する大阪城物語というものも紙芝居を使って、大阪に対する深い愛情、大阪って歴史があるねんなということをですね。これは実は大阪城の石垣になる石が川の底に沈んでたんですね、これは九条にございます。いったん沈んだ、川に沈んだ石は落城につながるから使わなかったんですね、これを「残念石」といいます。九条は結構歴史がありまして、大阪市電発祥の地ということで、こういう二階建ての市電が花園町というところから大阪まで 5 ㎞つながっていたというところで九条は結構…。これは昔の遊郭ですね。日本で初めて、大阪一、日本に一個しかないということを意識してツアーの中に入れて、九条を愛する人を一人でも多くしようと考えております。ありがとうございました。

高梨：先生どうもありがとうございました。では、続きまして「ザンクト・パウリは住みごたえのあるまちか」と題しまして、Steg のクルト・ラインケンさんにお話を頂戴いたします。なお、通訳は大阪日独協会の常任理事でいらっしゃいます和田展子さんにお願いいたします。なお、午前中の通訳と今の同時通訳をしてくださってますのがグリュック翻訳工房の杉岡数幸さんでいらっしゃいます。ご紹介が遅れましたことをお許しください。

ラインケン：大場先生、ご来場のみなさん、今日のご招待に対して誠にありがとうございます。色々なものを紹介する前に、ザンクト・パウリが広さとしてどれくらいのものになるのか、データをお見せしたいと思います。午前中にシューベルト先生がおっしゃったように、Gemütlichkeit、心地よさというのは非常にネガティブなものも含んでおりまして、それを使うのはどうかということを私どもは話しまして、「住み心地のいいまち」という形で紹介したいと思います。「クリエイティブな環境」ということでご理解いただけると思います。

過去 25 年間で行われたものを、ここで 4 つほど紹介したいと思います。ハンブルはも

ともと港湾でしたが、商業都市として生まれ変わっております。なぜ港湾都市としてハンブルクが衰退してきたかというと、ハンブルクでは造船が少なくなりまして、韓国などに移りました。そして鋼鉄を使うような工業が衰退してきています。先ほどの工場は 25 年ほど完全に何もなかった空（から）の状態だったのですが、今では 4 つ星のホテルに生まれ変わり、ザンクト・パウリのハイライトになっております。ザンクト・パウリにはレーパーバーンという非常に有名な歓楽街がありますが、現在では非常に文化的な地域として生まれ変わりつつあります。ザンクト・パウリはハンブルクで有名な歓楽街でして、年間 2500 万人の人が訪れます。今日では文化的なもの、音楽的なものが注目されており、ミュージカルの劇場が 5 つ、音楽的な建物が 5 つございます。25 年間に収入の変化がございまして、ここには若干収入の良い人々が住むようになってきたというのも、この町の変化です。ザンクト・パウリにはここ二年くらいに新しい建物がありまして、後ろの方に見えている 3 つの建物のうち 2 つが会社の建物で、一つはホテルになっています。そのような面からザンクト・パウリがより、まちとしての機能を多く持ってきております。ザンクト・パウリはここに住んでる人だけではなく郊外に住んでいる若者もここを訪れるようになりまして、このようにカフェに座っていろんな人たちと話をするコミュニケーションの場に生まれ変わりつつあります。ここの四つ目の変化は、若い人たちが音楽的にここで始めてみようと、実験的に試せる場所として、ここが生まれ変わりつつあります。クリエイティブで、ここでテストしてもいいかなという町に変わりつつあります。

ザンクト・パウリの人口は 2 万 8 千人で、その中でも比較的貧しい人々が多く住んでいる地域もあり、市から公的な支援を受けなければならない人々が多く住んでいる地域です。もう一つ重要なことは、この地域に外国人が多く住んでいて、35%程度が外国人住民です。ほかのハンブルクの地域は 12%ほどですが、それからするとこの地域は外国人が多く住んでいる割合が高くなっております。

もう一つ特別な例として、ここは牛の屠殺場だったということを紹介したいと思います。これは 1911 年に建てられまして、本来全部取り壊されて、新しい住居を建てる予定の建物でした。それで市の方と関心のある方々を集めて、この建物を保存する方法はないかというラウンドテーブル的なものを設けまして、いろいろどういうものができるかという話し合いを始めました。いろんなアイディアが出てきまして、トルコ風のモスクですとか、幼稚園ですとか、どういうものに生まれ変わらせようかという話をしました。そうこうしている内に、市の方では新しい大臣が誕生いたしました。その大臣というのは、このプロジェクトに非常に関心を持っていたのですが、それに投資するというような考え方はなかったようです。この建物は相当大きな費用をかけずに街の中心部になかったにしろ、生まれ変わらせようと、比較的費用をかけずに生まれ変わらせようという試みを行いました。ここの生まれ変わったところの建物を何に使ったかというと、身体障碍者の画家に活動をしてもらいました。ここで彼らが活動することによって、ドイツ全土に自分たちの作品を展示したり販売する拠点を設けることができました。建物の隣の空間は蚤の市が多く開か

れるんですが、そこで催される野外の音楽イベントなどにも使われております。ここで活動する画家たちが夏祭りを、今週末に行うということで全土から皆さんに来てくださいということを呼び掛けております。ザンクト・パウリで我々が提供しているのは、年に一回、全土の芸術家にここに集まって展示をしていいよということをやっております。ここでは 24 時間営業が可能でして、いろいろな店に声をかけて、我々はプラカードを作ったりしていろいろなオーガナイズをしているんですが、24 時間どんなところでも店が開いているということをやっております。テラスハウスというところにあります、こういった絵画を展示したところをご覧いただけると思います。このように作品を並べまして、場合によっては作品の販売も可能であります。このクリエイティブな環境はハンブルクだけではなく、ドイツ全土で有名となり、全土から集まってきてこういうものに参加するという人が増えてきております。芸術家はここに展示すれば、作品を販売して収益を得ることができます。これは展開するというモットーのもとに、市を活性化させるという試みでございます。これはミュージックセンター、「カロスター」になります。ここには小さい事務所がいくつもございまして、15~20 平米の小さな部屋を持つことができまして、それらは安く借りられ、ここに事務所を構えることができます。ここには上の方に事務所がございまして、音楽ソフトなどの生産物を売ることができます。全部で 600 万ユーロが投資としてかかったのですが、そのうちの 200 万ユーロをハンブルク市が投資しております。音楽だけでなくて、カバーといったものを生産する人たちが活躍する場でもあります。ここでいろんな名前が見られますが、どれだけの人がこれで活動の場を設けているかというのがわかります。ここで来年また新しい建物を作ることになっておりまして、ここは事務所が 15 平米くらいの小さなものを、賃貸として貸す予定にしております。ユニットが 130 ほどありまして、200 人ほどの借主が入る予定です。ここで借りようとしている人々はそんなに高い要求をしているわけではなく、小さいところで活動できればいいということで、事務所として活動できる場所を求めている、場所を借りたいという人々です。先ほどのような部屋を借りるのではなく、これはアメリカから来たものなんですが、テーブルとコンピュータだけで仕事をする人たちが、こういう感じで仕事をしております。

このような動きはザンクト・パウリだけに見られるもので、他のハンブルクの地域には見られません。ハンブルクは音楽都市として大変有名でして、いろんなバンドが活躍しているのですが、その中でもビートルズは約 50 年前にここから活動を開始しまして、今年がその 50 年の記念の年になるので、50 年祭を祝っております。レーパーバーンにビートルズの記念碑のようなものがございまして、観光客に大変好評をいただいております。ザンクト・パウリには非常に有名なミュージッククラブが多くございまして、政治も経済もザンクト・パウリの地域に音楽拠点を設けることを促進しております。ここのクラブからビートルズは、そのキャリアをスタートさせております。このように、ハンブルクは小さなコンサートもいろんなところでできるようになっておりまして、このような場所が音楽家には好まれております。

ザンクト・パウリのことに関して、サッカーについて全然触れておりませんが、今度はサッカーについて触れたいと思います。ちょうど、ブンデスリーグで活躍する場が出てきました。世界的に有名な FC バイエルンとかシャルケ 04 なんかもザンクト・パウリに来てプレーするのではないかと思います。ハンブルクのサッカーファンは、阪神ファンと同じように地元に根付いた地元のクラブを応援するという傾向が見られます。次にお見せするのは Markstraße と呼ばれるショッピング通りであります。これは 20 年間私共が開発を手掛けております。ここに 20 年間の間に大きな変化がございまして、ドラックストア的なものが閉鎖されて、また新しい物に生まれ変わるということを手掛けております。ここではファッションですね、洋服のデザイナー達が多く活躍されてまして、人によっては大成功した人もいますし、人によっては早々成功しないというものもありますが、ここにファッションの関係が集まっております。サッカーと洋服はあまり関係ないように思えますが、ザンクトパリのドクロマークがございまして、それを洋服に印刷するということも見られます。よくドイツ、特にドイツ人には外に座るということが重要でして、ザンクト・パウリにもこのようなことが見られます。ここでサッカーの試合を観戦しながら外で座っていると。ここの通りにはいろいろな国のレストランがございまして、トルコ、イタリア、ギリシャといった違う文化の飲食店が並んでおります。このよう芸術的なものを街に建たせるということも街にとっては重要です。ここでは自動車が入ってこないように、何かいいアイディアはないかと芸術家に委託したところできたのが、このような像であります。

ここで重要なのは,芸術家がこのまちに住んでいるということです。この地域には先ほどから申しておりました芸術の重要性ですが、ここにギャラリーを設けたことです。ここでもいろんな人たちがギャラリーにいろんな作品を展示しまして、直接来場者に買ったり売ったりする施設も設けております。後二つほど写真をお見せしますが、ここではグラフィッカーに外壁をどうにかしてくれということで依頼して、作ったものが彼らの作品になり、このように外壁を飾っております。ここではここに住んでいるような自分の街をどうするかというところで活躍の場を与えることは重要なことだと思っております。ザンクト・パウリには独自のミュージアムがございます。これは市民の方から活性化として作られたものの一つであります。この講演で皆さんにザンクト・パウリのまちを周遊していただいたと思いますが、このような私共の街がどのようなものかということがお分かりいただけたと思います。

高梨：前半部分が以上で終わりまして、この後 10 分の休憩を取らせていただきまして、その後一部、二部をとおしてご報告いただきました皆様に前に出ていただきまして、パネルディスカッションを行いたいと思います。10 分後にまたお戻りいただきますようによろしくお願いいたします。